

草庵仏教

第140号
(発行日)
2002年2月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638126 西宮市
小松北町1-2-3
電話・FAX(0798)
41-5346
(発行人) 土井紀明
メール naridoi.ne.jp@lycos.ne.jp
http://members.tripod.co.jp/souan211

《 聞法会ご案内 》

- * 同朋の会 (念佛寺)
22日午後2時
.....
- * 聖典講座 (念仏堂)
第1土曜日午後3時
- * 念仏座談会 (念佛寺)
第3土曜日午後3時

怒りとお念仏

T 「知り合いの人が私の悪口を言っているのがまわりまわって私の耳にまで聞こえて、その人に怒鳴りつけたくなるほど腹が立つのですが、腹が立たないようになるにはどうしたらいいのでしょうか」

J 「悪口を言われて、カッとなってしまう自分が情けないのですね」

T 「腹の立つ自分が情けないだけではなく、むしろくしゃした気分がイヤなんです」

J 「そういう時に今までどうしましたか」

T 「散歩に出たりして気晴らしをしようと出かけたりますが、それでもなかなかおさまらず、二・三日ムカムカしてしまっています」

J 「腹を立てないようにするのはとても難しいことで、法然聖人ですえ、こうした自分の心に「力及ばずさうろう」と仰っています」

T 「腹が立たない良い方法はないでしょうか」

J 「そんな都合のよい方法は知りません」

T 「そうですか。仕方ないですか。じゃあJさんはこんな時どうしてますか」

J 「腹が立ったら、お念仏して

いるだけです。無理に腹の立つのを押さえようとしませんが、また押さえられるものでもありません」

T 「腹が立った時にお念仏するとどうなるのですか」

J 「別にどうもなりません、怒りがお念仏を申す縁になって、怒りの感情はしばらくは持続しますが、ナムアマダブツ、ナムアマダブツと、お念仏と一緒に流れていくようです」

T 「それだけですか」

J 「そのうちにお念仏の光に照らされるのでしょうか、ふっと自分に目が向いてきます」

T 「自分に目が向けられるとうなんでしょうか」

J 「怒りの煩惱の深い自分だなあと身に沁みて知らされます」

T 「煩惱具足の我が身だなあと」

J 「多くの煩惱がすでに身に付いてしまっていて離れられない我が身ということですか。たとえば悪口を言われても、自分の心にもともと怒りの因がなければ、腹も立たないでしょう。けれど自分の中に常に怒りの種をもつてますから、何か気に食わないことにぶつかると怒りの炎をもやすのです」

T 「怒りの原因は相手にある前に自分の方に一番の原因があるということですね」

J 「ええ。たとえばドラム缶の中に灯油が入ってて、そこにマッチの火を投げ込めば燃え上がります。もしドラム缶の中に油が無く水だったら、いくら外からマッチの火を投げ入れても燃え上がりません。そのように人から悪く言われたり迷惑をかけられて腹を立てるのは、私自身の中に怒りの火を燃やす因があるからです。その因を仏教では瞋恚の煩惱と言います」

T 「そのたとえでしたら、瞋恚の因は私の中であって、外からの悪口などは縁でしかないということになりますか」

J 「ええそうです。ですから、人からけなされるといふ縁によって、私の中にすでにある瞋恚の大きさがいよいよ知らされます。本当にお粗末な私だなあと実感します」

T 「自分の煩惱の深さを知るとどうなるのでしょうか」

J 「腹が立ったのはあいつやこいつのせいだとばかり思って責め立てていた私が、私自身の煩惱の深さを実感すると、相手を責めるばかりの矛先が和らぐのではないのでしょうか」

T 「そうですか。でもいつもそういう風にかないこともあるでしょうね」

J 「そうです。言わなくてもいいことを言ってみたり、不機嫌な態度をとってみたいね。ほんとうにおはさしいことですよ」

T 「瞋恚の煩惱というのは、個人のことだけではなさそうですね。この前のニューヨークの貿易センターへのテロ事件もアメリカに對する怒りや怨みから、またその報復でアメリカがアフガン攻撃したのも怒りの報復であつたし、そういうことを考えると怒りというのは恐ろしいですね」

J 「そうですね。瞋恚の煩惱について香樹院徳龍師が法語を残しておられます。これらを讀むと実に瞋恚の恐ろしさが知れます。瞋恚の煩惱こそ地獄を生み出す源だと仏教では教えられています」

T 「地獄は瞋恚の煩惱から現出してくるのですか」

J 「ええそうです。地獄はどこかに初めから存在しているのでありませぬ。瞋恚の煩惱が感得する境界です。煩惱の薄い菩薩や煩惱の無い仏には地獄はないのです。そういう点では地獄は有るのではなく、己の煩惱が造るものですよ」

J 「そうですか。ではその香樹院師の言葉を聞かせてください」

T 「香樹院師曰く

* 貪水瞋火、水は大水となれば害になるが、わずかのところでは害とはならない。火はわずかでも物を焼く。火ほど恐ろしいものはない。貪欲は他の善根を

害することはない。瞋恚は我がなした善根までも焼き滅ぼす。

*家の内が不和になるのも国家の乱れるのもみな瞋恚である。

*たとえ百千の食欲を起こすとも、一念の瞋恚を起こさぬよう。

*地獄の猛火も我が胸から現れる。

*すべて形の見苦しきは瞋恚の煩惱のあらわれ。

◇

T「なるほど、身に沁みるお言葉ですね。この中で〈瞋恚は我がなした善根までも焼き滅ぼす〉というのはどういうことですか」

J「たとえばAさんがBさんの世話を献身的にずいぶんしてきても、何かの事で行き違いがあつてAさんが腹を立ててBさんのことを罵ると、今までAさんがBさんにしてきた人助けの善根は帳消しになるといふ、一例を取るとそういうことだと思えます」

J「こういう事はよくありがちですね。そして、〈瞋恚の火はわずかでも物を焼く。火ほど恐ろしいものはない〉という言葉を聞くと、いかに瞋恚が人々生活や人間関係を破壊させるものかが伺えます」

T「具体的にどういう事ですか」
J「一例ですが、最近日本では

何分かに一組が離婚しているようですが、その原因は、ちょっとした言い合いやケンカがすぐ離婚にまで突っ走ってしまうというケースが結構あるとのことですね。そうすると夫婦が自分の心の怒りを処理できなくて、夫婦関係をだめにし、それによって子供まで不幸に巻き込んでしまふ、そういうことがしばしばあるようです」

T「そうですね。それからへすべて形の見苦しきは瞋恚の煩惱のあらわれは少し誤解されやすい言葉のように思いますが」
J「ええ読み方によってはね。しかし、ここで言われていることは、心の中にいつも不足不満がたまり、怒りっぽくなり、何かという人と人に文句をいうような生活を続けていくと、形相までもがとげとげしく、見苦しくなると言われるのでしょうか。これも否定できない事実のように思えます。心の有様が外の表情を作っていくということはあり得ることだと思えます」

◇

T「思い当たりますね。そういう事からも自分に起こる怒りに気をつけたいものですね。自分の心の中から起こる怒りの煩惱に対して、どういうことが大切でしょうか」

J「さきほど申しましたが、自分の胸に起こってくる怒りを起こらないように自分で蓋をすることはとてもできないですね。

ただ怒りを起こりやすくしているいろいろな原因を知って、それに対処することはできるでしょう」

T「どんな原因がありますか」
J「いろいろあると思いますが、自我的な怒りを起こりやすくしている本に、自分の人生や自分に対する不足不満いわば満たされない感情があるのではないかと私は思います」

T「他者に対して怒る前に自身の人生に満足感がないのですね」

J「ええ、自分の中に満たされないものがあるから、それを他者によつて満たそうとする。しかし、他者によつては満たされるものではないから、そのやりきれなさを人にぶつけるのが怒りである場合が多いですね」
T「具体的な例で言ってください」

J「たとえば、人間はだれでも愛されたいし優しくされたいですね。人間には強い愛情欲求があります。その欲求を人に求め、相手のやさしさを期待しますが、そう期待通りには愛されるものではないですね。そうするとへあの人は冷たい」という怒りに変わります。またそういう愛情欲求の不満がつもりますと、自分の人生全体がやりきれないといううつぶんがたまりまうてイライラし、腹立ちやすくなります」

T「そうすると、人間の強い愛情欲求はどこで満たされるので

すか」

J「それは無限者の愛にふれることによつてです。仏の慈悲とか神の愛というのがそれです。古来から神仏の慈愛が盛んに説かれてきましたが、この慈愛がなくては満足して生きられないのが人間ではないでしょうか」

◇

T「真宗でも如来大悲が常に語られていることは、人間の幸せになくてならぬことだからなのですね。他に怒りを起こす種はありますか」

J「いくつかあると思います。たとえば生理的状态が引き金となることもそうですね。空腹になった時とか、疲労した時などは腹立ちやすいですね」
T「肉体が老化することは慢性的に疲労感があるといつていいですから、歳を取ると一層腹が立ちやすくなるといえますね」

J「ええそう思います。老人になると円熟するどころか、ますます煩惱が盛んになると言つても過言ではないですね。聖人が一念多念文意に

*凡夫というは、無明煩惱われらがみにみちみて、欲もおおき、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころをおおき、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえずとお示し下さる通りです」

◇

T「煩惱は一生なくならないのですね」

J「ええそうですね。だからこそ、煩惱の止まない凡夫を助けんと申し召して寄り添いたもう如来の大悲をいただくことが、煩惱具足の凡夫が和らいで生きる道となるのでしよう。歎異鈔第十六章にも

*わろからんにつけても、いよいよ願力をあおぎまいらせば、自然のことわりにて、柔和忍辱のころもいづくべしと仰せられています」

T「柔和忍辱のころとは何ですか」

J「自分に不都合な事にあつても、それを冷静に受け取り、柔軟に他の人に対処していく心のことですが、分かりやすく言えば他の人と争わず、憎まず和らいでいく心です。その柔らかい心は如来の大悲願力をいただいていくところに自然にたまわるのだと仰せられるのです」

◇

T「そうすると、腹立つことはどうすることもできないけれど、腹立ちをお念仏の縁として、お念仏していくところに、我が煩惱の深さが省みられ、また煩惱具足の私を救おうとされる如来の大悲をうち仰いでいく、そこに自ずと柔和なやわらいだ心を我知らず賜るのですね」

J「ええ、いつもそうありたいですね」

(了)

歎異抄 第十一章第八講

このひとは、名号の不思議をも、また信ぜざるなり。信ぜざれども、**辺地・懈慢・疑城胎宮にも往生して、果遂の願のゆえに、ついに報土に生ずるは、名号不思議のちからなり。**これすなわち、誓願不思議のゆえなれば、ただひとつなるべし。

(第十一章)

(現代語訳)——このような人は、名号の不可思議なはたらきも信じていないのです。しかし、信じてはいないけれども、念仏すれば**辺地・懈慢界・疑城胎宮**などといわれる方便の浄土に往生して、果遂の願により、ついに**真実の浄土**に生れることができます。それは名号の不可思議なはたらきによるのですから、この二つはまったく一つのものなのです。

〈この人は〉というのは、前出の「念仏を自らの修行とし、その功德を往生の助けにしようという自力の念仏の人」のことです。この人は当然のことですが、名号の不思議を信じていないのです。名号の不思議というのは「我が名を称えよ、浄土へ生まれしめん」という、阿弥陀仏が誓われた念仏往生の願のことです。

ただこの「我が名を称えよ」という誓いは私を「全面的に救う」という如来の絶対救済のお心ですが、このお心がなかなかすぐには凡夫に通らないのです。

「我が名を称えよ」とは私を「そのまま救う」という仰せですが、「そのまま

救う」がなかなか素直にいただけなのが私たちです。それは何故かというと、私たちが自分を「私の力では助からぬ身」と知らぬからです。まだ「どうかすれば自分は何かなる」という自力執心がありませんから、なかなか「ソノママなりを引き受ける」のお心である「ただ称えよ」という仏心大悲がいただけなのです。

ところが阿弥陀仏は、自力心の容易に離れず、弥陀の**大悲**がただけでない私たちを、なお何とかして弥陀のまことの救いに引き入れてやりたいと思し召して、そのために誓われたのが**第二十願**で、方便の願といわれています。

方便というのは**真実**(この場合、第十八願の救い)に入れるための教育的手段という意味です。この方便は阿弥陀仏が自力の心の強い私たちを、何とかして手がかりを付けて**真実**に気づかせてやりたいという、**広大な慈悲**からのお手立てであります。それが**第二十願**です。

私たちは「我が名を称えよ、必ず救う」という**第十八念仏往生の願**を聞いて「称えたら救うて下さる」と思って、**南無阿弥陀仏**を称えることを励むのです。これは**第十八願のお心**を聞き損なっています。

しかし、そのように名号を称えることによつて救われようとして、宗教的効果を期待して念仏を修する自力念仏の者、そういう者を何とか**第十八願の真実**に引き入れるという結果を完遂させたいという**阿弥陀仏の誓い**が**二十願**ですから、**二十願を(果遂の願)**ともいわれるのです。ほんとうに**阿弥陀仏の至れり尽くせりの大悲**がこの願にも表されています。

す。

念仏を称えて、その功德を積み、それを助けにして往生しようと計らう者、その者を導きたいという**第二十願**は「**たとい我、仏を得んに、十方の衆生、我が名号を聞き、念を我が国に係けて、もろもろの徳本を植えて、心を至し回向して我が国に生まれんと欲わんに、果遂せずんば、正覚を取らじ**」

(わたしが仏になるとき、すべての人々がわたしの名を聞いて、この国に思いをめぐらし、さまざま**功德の本**を積んで、心からその功德をもつてわたしの国に生まれたいと願うなら、その願いをきくと果たしとげさせましょう。そうでなければ、わたしは決してさとりを開きません)と表されています。

「我が名号を聞いて」というのは、「名号を称えるものを浄土に生まれさせる」という**念仏往生の願**を聞くことです。

しかし、このいわれを自力の心で聞いてしまい、「念を我が国に係けて」つまり**阿弥陀仏の浄土に生まれたいと願って、「もろもろの徳本」**つまり仏の名号の功德を、「徳本を植えて」あたかも田に**苗を植えて収穫を結果として待ち望む**ように、仏の名号を称えて(植えて)、「称えますのでどうぞ浄土へ生まれさせてください」「称えますから、この念仏で救ってください」という、そういうように念仏を助かる手段のように行じるのです。

そのことを広くいえば、**浄土に往生したい**と思つて、あるいは**助かりたい**と思つて、あるいは**信心を得たい**と思つて、

あるいは**楽になりたい**と思つて、その目的に向かつて行じるのです。

「心を至し回向して我が国に生まれんと欲わん」の「心を至し」とはまごころこめて、(回向して)とは念仏の功德を浄土往生という目的に向けて行じること、(我が国に生まれんとおもわん)とは、**浄土に生まれたいと願つて**ということなのです。

要するに、**浄土に往生したい**、**往生の身になりたい**、**何とか助かりたい**、**信を得たい**、**楽になりたい**、**宗教的体験をしたい**、**そういう目的達成の手段として念仏を行じていく**、それを**二十願の念仏**といひます。

それは一方では、**第十八願の不思議**を信じていないという**失**があります。しかし、一方では**二十願の「そういう自力で念仏を称える者をも見捨てない、かならず真実に帰入せしめずはおかない」という阿弥陀仏の果遂の誓い**に預かっています。ゆえに**時**いたつて、

「**定散自力の称名は、果遂のちかいに帰してこそ おしえざれども自然に真如の門に転入する**」(浄土和讃)

(定心・散心の自力の念仏は**第二十願の果遂の誓い**によつて、**教えなくとも自然に第十八願の他力念仏に転入する**)のであります。やがて**阿弥陀仏の誓い**の力によつておのずと**真実の世界(真如の門)**に入れしめられるのです。

また、この世で**第十八願の信心**に入ることが出来ないなら、**化土に生まれてそこで育て**いただいて、やがて**真実の世界**である**真実報土のお浄土**に生まれるのです。

信仰夜話

明治時代に足利義山という真宗の高僧がおられました。厚いご信心の方であり、また真宗の碩学で龍谷大学の教授もされました。その足利義山師の法語を集めた「義山法語」という小さな本があります。この法語は今読んでも大変有難いもので、現在でも出版されています。この中に、あるご婦人へのお手紙に

「われわれを参らすために、お浄土をととのへ待ちわびたもうを、阿弥陀如来ともうすなり。」

そのお浄土へ参るには、願というものと行というものの二つが入り用なり。されども、そのつとめられぬことをば、あらかじめ知ろしめして、その身がわりを仏のお手もとにつとめくだされて、衆生にあたえんとよびかけたもうを、南無阿弥陀仏とはいふなり。

しかれば、われわれにおいては、何のぞうさもなく、善人は善人ながら、悪人は悪人ながら、おたすけにあづかることよと、お受けもうしたるが信心なり」とあります。実に平易に真宗の要を説いて下さっています。この中に「身がわり」というお言葉が出てきますが、同じ義山法語の中に、もう一カ所「身がわり」の語があります。それはある御同行さんへのお手紙の中に

「われらは一生のあいだ沢山なるつみとが（罪咎）ありて、地獄におつべきを、この六字（南無阿弥陀仏）の名号の徳に

て消しうしないたもうなり。よって身がわりのおかげにて往生をさせたもうことと疑わぬを信心といい、ありがたやと思ふ心を口にあらわして称うるを報謝の称名という」とあります。

これらのご法語によりますと、私たちは今まで己の煩惱にほだされて、沢山の罪や咎を重ねてきました。それゆえ、罪悪の結果として地獄へ墮ちるべき身といわねばなりません。しかるに阿弥陀如来はこのような私どもを大悲したまい、御身みずから我等の罪悪を担い、浄土に往生するに必要な願と行を全てつとめはげみ、その願行の功德を南無阿弥陀仏の名号に仕上げ、これを私たちに与えて私たちの一切の罪悪を消して浄土へと生まれさせて下さる、とのご教示です。如来は浄土に往生する願と行の全てを、罪悪の私の身がわりとなって勤めてくださったのであります。

それゆえ信心とは「身がわりのおかげにて往生をさせたもうことと疑わぬを信心といい」ます。

◇

こういうように義山師は大変平易に書いておられますから、ややもすると私たちは軽く受け取ってしまします。しかし、この「地獄に墮ちるべき私を浄土へ生まれさせるために、阿弥陀仏が私に代わって地獄へ墮ちる罪悪を消したまい、浄土に生まれるべき願行の因を勤め励まされた」ということは、親鸞聖人の主著「教行證文類」のまさに中核の内容なのです。

「教行證文類」は信巻が中心であり、信巻の中心は三心積であるというのが古来からの定説です。その三心積に説かれて

いるのがまさに義山法語のこの内容なのです。試みに少しだけ三心積の箇所を引用しておきます。

「一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして、清浄の心なし。虚偽諂偽にして真実の心なし。二心をもつて如来、一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫において、菩薩の行を行じたまいし時、三業の所修、一念・一刹那も清浄ならざることなし、真心ならざることなし」（信巻）

（現代語訳）――すべての衆生は、はかり知れない昔から今日この時にいたるまで、煩惱に汚れて清らかな心がなく、いつわりへつらうばかりでまことの心が無い。そこで、阿弥陀仏は、苦しみ悩むすべての衆生を哀れんで、はかり知ることができない長い間菩薩の行を修められたときに、その身・口・意の三業に修められた行はみな、ほんの一瞬の間も浄らかでないことがなく、まことの心でなかったことがない）

◇

ですから南無阿弥陀仏の名号のいわれは「汝、罪深く悪重く、まことのいのちを失った、死骸に等しい者よ。汝の罪咎の全ては汝の身がわりとなってこの弥陀が始末をつけたのだ。汝を私が引き受けて永遠の浄土へと至らしめる」という意味であり、それは一言でいうと「汝を助ける」との仰せであります。南無阿弥陀仏は私の身代わりとなりました。身がわりの弥陀なのです。江戸の末期にいられた厚信の貞信尼の歌に

「そのままと 聞きたびごとに 涙かな かぎりなき身を 捨てし喚び声」

とあります。「そのままなりを引き受ける」と喚びたもう南無阿弥陀仏のお声は、

暗黒に滑り込むべき私を救おうとして身を捨てて下さった阿弥陀仏の喚び声であります。

◇

こういう話は何か現実離れをした話に聞こえるかも知れません。しかし、人間は何をやっても、最後に残るのは無知無能の煩惱具足の凡夫であり、破綻してしまっている私ではないでしょうか。いわゆる自分で自分を変えようとするのができない、出口のない救いがたい身が私のいつわらざる現実と知るとき、こんな私のために、私に代わって、私にいのちをよみがえらすために、願行のご苦勞をしてくだされた（身代わりの弥陀のまします）こと、それはもはや単なる説話でもなければ教理でもない、いわんやおとぎ話ではない、歴史をこえた永遠の大悲の真実が一切衆生の上に行為する不可思議の働きのなのです。（了）

〈任職つれづれ日誌〉

今度の年末年始は縁の方が二人も亡くなられ、また娘の出産もあって、毎日バタバタし正月三日間も毎日夜を付けてお参りに出かけるような事で、やっと落ち着いたのが八日頃になっていた。一月一日。修正会の後、雑煮とお屠蘇とおせち料理を頂く。頂いた年賀状に目を通す。毎年手間暇かけて工夫をして作られた年賀状を送ってくれる友もいる。そうかと思えば、若い頃一度だけお会いしただけの縁で、もう三十年以上年賀状を交換している人もある。年賀状の縁は不思議である。一月二十二日。同朋会。八名の方が極寒の中にお参りして下さった。

一月二十六日。新聞の投書に仏教学者の山口氏が「パーミヤンの石仏の再建にお金をかけるより、

そのお金を難民のために使うのが仏教徒の心」と
あった。同感である。